

尾道総合病院緩和ケアセンターと 当院の緩和ケア医療・活動について

2020年10月

尾道総合病院緩和ケアセンターが開設され、
当院および尾三地域の緩和ケアと
患者のQOLの向上を目的に活動しています。

尾道総合病院 緩和ケアセンター

尾道総合病院緩和ケアセンターの機能・役割

1. 緩和ケアチーム・緩和ケア外来の管理運営
2. 看護体制の管理運営
 - 1) がん看護カウンセリング（がん看護外来）
 - 2) 看護カンファレンス 患者・家族の苦痛に関する情報を外来や病棟看護師等と共有
3. がん患者の緊急対応：緊急緩和ケア病床の確保
4. 相談窓口：緩和ケアに関する相談支援
5. 地域連携：地域の医療機関の診療従事者との協働による
緩和ケアカンファレンスの開催
6. 教育：緩和ケアに関する定期的な研修会
7. 緩和ケアに関する情報収集・管理・評価

緩和ケア外来での取り組み

1. がん患者の全人的問題へのとりくみ

身体的・精神的・社会的・霊的問題解決への対応

2. がん患者の意志決定支援・ACP

患者・家族の治療や療養への意志決定の支援

現在そしてこれからどのように生きていきたいですか？

3. 地域連携

地域であなただけが生きていくのを支えます！

がん患者の意志決定支援・ACPについて

参加者： 患者・家族・緩和ケア担当医
緩和ケアセンター所属認定看護師

1. 患者の人生観に基づいて、みんなで考える
2. がん終末期後期の説明内容：
 - 療養場所（当院・住居近くの病院・ホスピス・自宅）
 - 自力でできなくなること（具体的に）
 - 利用できる医療介護サービス（往診・訪問看護・介護保険など）
 - 残された時間 1～2ヶ月

がん患者のADL曲線を用いた意思決定支援

認定看護師と一緒に、患者家族同伴で話し合う

機能
生活の質

高い

低い

経過

これまでの生活を維持し、
やりたいこと、やらない
といけなことをしてく
ださい

外出できなくなる。
食事が取れなくなる。
トイレに行けなくなる。
ベット上の生活になる。

PPIスコア
予後予測

1~2ヶ月 死

化学療法のメリット・デメリットを
説明するときにも使っています。

どこで、どんな風に暮らしたいか

患者・家族への終末期後期の情報提供

外出できなくなったら
食事がとれなくなったら
ベット上の生活になったら

往診を受けるかどうか
訪問看護による点滴など
介護力があるかどうか

どこで生活しますか？

急性期病院（当院）・ホスピス・在宅療養・近隣の病院の違いについて
メリット・デメリットを含め情報提供

まれにそんなこと（終末期後期）は考えたくないという
患者さんもいます。→ 考える気になる時期まで待ちます。

「人生の残った時間をどこで暮らしたいですか？」の質問に対して多くの患者本人・家族は**できるだけ、我が家**と答えます。

「外出できないと病院に行けません。食事がとれないと点滴が必要です。往診や訪問看護を利用しますか？」に対して**医療従事者が家にくることに抵抗はない**が多いのですが、中には自宅に人様が来るのはいやと言われます。

「では、トイレに歩いていけなくなったら、どうしますか？おしめの交換が必要になります。下の世話などできますか？」ここで多くの人は「我が家かな？ 入院かな？」と戸惑われます。

多くの患者さんの声：我が家がいいけど、家にいても、家族に迷惑かけるし。

「我が家がいいけど、家にいても、家族に迷惑かけるし。」
に対する同伴している家族の言葉

1. 「迷惑だなんてなに言ってるの。面倒見るよ。」

と言ってくれたら、

1) 在宅主治医・訪問看護・ホスピスなどの社会資源

2) 緊急時の対応 などの説明。

→ 今後を見据えた当科と在宅チームとの関わり
を理解してもらう。

2. 「そうね。面倒をみる自信がないわ。」と言われたら

→ 次ページ

そうね。面倒をみる自信がないわ。

自信がない理由は？

1. **介護力**：訪問看護・在宅医の説明をしても、無理だと判断されれば、ホスピスなどの入院予約など在宅医・ホスピス・当院での連携をとる。
2. **不安**：訪問看護・在宅医の説明不安の対処法を理解し、在宅を希望されれば、
 - 1) 在宅主治医・訪問看護・ホスピスなどの社会資源
 - 2) 緊急時の対応 などの説明。

→ **ホスピス・近隣の病院などのメリット・デメリットを説明し、今後を見据えた当科と在宅チーム・医療機関との関わりを理解してもらい、可能な範囲で在宅療養を維持する。**

地域連携に必要な情報の共有

1. 開業医の情報
2. 訪問看護ステーション
3. 調剤薬局
4. 訪問介護ステーション
5. 医療機器・介護用品業者

→ 退院前カンファレンス・外来での情報交換

この意志決定支援の取り組みにより、
最後まで在宅で生活した患者さんや
できるだけ在宅で生活した後、
ホスピスに入院した患者さんが
増えています。